

～読書の扉 パート2～

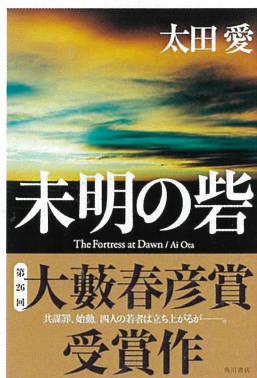
弁護士 田中 勇輝

昨年読んだ小説の中で、二冊ほど感想を書いてみたいと思います。申し訳ないことに、ネタバレなしに書く能力がありませんので、ほぼネタバレという前提でお読み頂ければ幸いです。

まず、一冊目は、太田愛さんという方の、『未明の砦』という小説です。太田愛さんは、ドラマ『相棒』の脚本などもされている脚本家兼小説家ですが、小説では、他にも『天上の葦』などが有名です。

『未明の砦』は、とある4人の男性が警察に追われるところから始まります。しかし、警察内部では、テロなどを扱う公安警察が主体となり、所轄の警察署の刑事には何の容疑で追っているかも知らされていません。所轄の刑事の一人がそのような上層部のやり方に疑問を感じ、4人の男性の素性を調べていきます。そして、4人の男性が2019年に成立したテロ等準備罪、いわゆる共謀罪の容疑とされていることが分かります。しかし、刑事が4人を追う過程で、さらなる事実が判明し、4人はテロなどを行おうとしていたものではなく、とある大企業の臨時工員として勤め、仲間が過労死をしたことから、自分達や社員の労働状況を改善するために労働組合を立ち上げ、多くの社員に訴えかけようとしていただけだということが分かります。とある大企業は日常的に労災を隠蔽し、政治家を使って警察を動かし、共謀罪によって、その動きを抹殺しようとしたというものです。内容的にも、共謀罪が濫用される恐ろしさを問うとともに、労働者派遣法や労働関係法の改正が財界の影響を受けて行われ、真に労働者保護を目指すものとはなっていないことなどを訴えるものとなっております。勉強させられました。

読み終わった後、現実でこれが起こり得るかということを考えてとき、SNSがこれだけ普及した現代では、4人が共謀罪で逮捕されたとしても、労働組合が立ち上げられていたことなどが明らかにされるだろうし、難しいのではないかと思います。しかし、この原稿を書いている2024年終わり、オールドメディアvs SNSと言われ兵庫県内も騒がしい状況です。一般メディアが信頼をなくし、SNSや一部週刊誌が世の中を動かしているのではとさえ思える時代となってきました。先ほど、SNSが普及した現代では、事実を包み隠して共謀罪で逮捕などというのはあり得ないのではないかと書きましたが、今の状況ですと、SNSもデマか真実か分からないものが溢れてしまう昨今では、本小説で描かれた出来事も強ちあり得ないことではないかもしれないと思います。



もう一冊が、言わずと知れた池井戸潤さんの『俺たちの箱根駅伝』です。私は、箱根駅伝の番組自体は、正直に言って、3分以上観たことはありませんし、毎年結果すら知らないという体たらくですが、池井戸潤さんということで読んでみました。しかし、そんな全く予備知識のない私でも、どんどん引き込まれ、最後は泣けました。さすが池井戸潤さんというところでしょうか。

箱根駅伝がテーマですが、描かれるのは、一つの大学ではなく、箱根駅伝本選出場を逃した各大学から一人ずつ選ばれた関東学生連合チームです。全く知りませんでした。学生連合チームというのは、本選には出場するものの、オープン参加ということで、順位も付かないし、記録も参考記録にしかならないということです。そのためか、毎年のように存続か廃止かが議論されるようです。昨年2024年は、学生連合チームは編成されませんでした。今年も編成されるとのことです。これを書くに当たって、学生連合チームの最高順位を調べたところ、何とというかやはりというか、最高順位は平成20年の4位で、当時の監督は青山学院大学の原晋監督だそうです。

さて、『俺たちの箱根駅伝』のストーリーに戻ると、学生連合チームのその年の監督が3位以上を目指すと言ったことから、多くの批判がなされ、また学生達からも反発がありました。やがて、学生達の走りたいたいという思い、箱根にかける思いが一つになり、激走が繰り広げられるという物語となっています。そして、テレビマンからの視点も描かれ、その年の担当プロデューサーが、上層部からお笑いタレントをゲストとして呼ぶことなど番組のエンタメ化をするよう圧力を掛けられますが、これまでの伝統を守り抜き、学生達の箱根にかける情熱、タスキをつなぐため、チームのために走る純粋な姿をありのままに伝えるだけで良いという番組の姿勢を貫きます。

物語としては、寄せ集めだった学生連合チーム一人一人の箱根にかける思い、そして、タスキをつないでいく思いがありありと描かれ、大変良かったです。

以上二冊の書籍を紹介させて頂きました。『未明の砦』は日本社会の危険な現状を小説という形で世に問い、『俺たちの箱根駅伝』は若者の情熱をありのままに伝える大切さを描いています。小説からも様々なことを学ぶことができます。このような時代でも、真実を見抜く力を養っていきたいと思います。

